



No.26 (通No.105) 2021年6月21日

てつがく なかにわ  
LEE'S レター 哲樂の中庭 2021年夏至

仕事をこえて、さまざまに考えをめぐらせ、それをまた仕事にいかすアプローチ

## 自力を出すためにも他力を頼る

### 支える人の学び

『支える人の学びの場:こころ塾』。医療、福祉、教育の専門職を対象とした1日限りの時間の塾で、京都大学の「こころの未来研究センター」が2013年から2019年にかけて毎年秋に開催していました。

上記の専門職の力を頼った後、その他の支える仕事の専門職を頼る人も多い。「こころ」についての体系的な学びは、あらゆる専門職の「支える人」に必要なと近年とくに感じます。

「支える人が相手(感)わす人)にならないよう、自身を律し、学ぶ。ちなみに、『こころのページ』というものもありました。

<https://www.sogensha.co.jp/kokoro/index.html>

### 「メリー・ポピンズ」!

「メアリ・ポピンズ」に例えられたのは2年前、以来なにかにつけ引用させてもらい、事務所移転後の新しい名刺にも「パーソナル・アシスタント」の紹介文に入れています。

先日おもいがけず映画のポスターまでいただきました。これは今後のお守りです。さっそくフレームを買って、机の前に掛けました。「メリー・ポピンズ」が微笑み。こちらもニッコリします。いつも心にメリー・ポピンズ!



LEE'S (リーズ)

〒541-0046

大阪市中央区平野町1-7-1  
堺筋高橋ビル5F 大阪NPOセンターRS-B507

リー・ヤマネ・清実

Lee Yamane Kiyomi

5月の初め、NHKのニュースサイトで昨年秋に起きた事件の追跡記事を見つけました。被害者はホームレスの女性、その生前をたどって知るキラキラした若い頃。古い写真にはキュートな姿。「こういう人が…、ギャップに愕然とした」と記者。記事を読むこちらも同じ、さぞかし無念、やるせない、

人生が(負の連鎖)に転じてしまった、その始まりは結婚だったろうと思います。記事には「夫の暴力により一年ほどで実家に戻り、その後東京へ…」と簡単にふれただけでしたが、結婚は大きな人生の選択、それを悔やむ羽目になってしまい、(キラキラ)が消えた。

大都市で失意の独り暮らし、食べていくにも大変。それでも一生懸命生きてきたのに、理不尽にも突然この世を去ることになる。それまでに、どうしてどこかに頼らなかつたんですか、どうして!と声を張り上げたい気持ちです。

5月中旬、新しく知り合った方がいます。聞けば若年期は過酷な家庭環境、心身は疲弊して、未来もないように思えたようですが、それでも年を重ねるうちに、何とかはい出して、今では専門職として仕事をされている。その過程で力になったのが、公的な支援機関とか。

先月5月は、これまで身近な暴力についてあまり考えていなかったと気づきました。なんと非人道、配偶者や親でもそれは犯罪、法的でなくても、生涯償うべき大罪。心身を恐怖と不安に陥れ、本来その人が歩むはずの未来を閉ざし、「生き地獄」を強いて、時には命を絶たせる。本当に酷いことです。

自力で一生懸命やって、それでも先の見えない時には、他力を頼る。今はそれなりに支援機関や団体、個人が社会に控えている。実際未来をひらいた人がいる。宿命は変えられない、でも運命は変えることができる、はずですね。

### 見聞感考 | 己を生ききり、最期はガッツポーズの「万歳！」

2020年立春レターのこの欄のタイトルは『「人生100時代」超えのファイナンシャルプラン』でした。95歳の元創業家、株投資は現役10年先までの生活資金もしっかり確保されましたが、今年の2月立春を迎えた翌日に逝われました。直前までお元気だったそうですから、スツと旅立ち、誰もが羨む最期です。

そればかりではありません。話を聞けば聞くほど、人間、生きたように逝くものだと思わされて感じました。なんと、保有する株式すべてを売り切ったタイミングが1月の株価上昇に合い、思いのほかの利益を得たのだとか。

また意識がある時に、「ほんの僅かでも利益がでるようなら売ってしまいますよ」とご本人に声をかけたら、OK、OKと、手ぶりで返されたそ

う。それが僅かなんてもんじゃないほどの額になった。任せられたお孫さんもビックリするやら、「おじいちゃんらしい」と納得するやら。

さっそくお孫さんが報告をして、利益の額を告げると、それを聞いたお爺さん、ベッドに横たわる身を伸ばし、両手を上げ、満面の笑みと、全てやりきった、高峰登頂に成功した、そんな表情をたたえて、「万歳！」を叫んだそう。

実際その場を見たわけではありませんが、話だけでも様子が目に浮かびます。心境もなんとなくわかるような気がします。

我を、己を、生きた、生ききった。他者から見ても、最後の最期、たぶん、ご本人自身がそう実感されたと思います。なんと、あっぱれ、しあわせ、大往生でしょうか。